

一般発表

地域スポーツ活動に大学が貢献できるか？

－大人のラグビー体験教室の取り組み事例－

福岡大学 村田 優作
 柿山 哲治
 乾 真寛
 村上 純
 下園 博信

キーワード：ラグビー，普及，地域連携

目的

スポーツ基本法では、スポーツは健康で活力に満ちた長寿社会の実現に不可欠なものであると述べられており、地域スポーツは健康増進やコミュニティの結びつきに対して重要な手段であると考えられている。本研究では、大学が地域スポーツ活動に対してどのように貢献できるかを明らかにすることを目的とする。特に今回は、福岡大学で行われた「大人のラグビー体験教室」の取り組みを事例として検証した。

方法

2022年と2023年に実施された、「大人のラグビー体験教室」に着目し、各年度の参加状況や参加者の情報、実施後に行なったアンケート調査などから各年度の比較検討を行った。教室では、元日本代表選手やリーグワンの選手、レフリーなど多数の専門的な講師に加えて、大学の用具や設備を使用して実施した。内容については、ラグビーの基本的なルールや技術に加えて、タックルやスクラム、ラインアウトなどの専門性の高い技術も行った。

結果と考察

参加状況は、2022年が応募総数441件、一回平均44.1名であり、2023年は応募総数208件、一回平均41.6名という結果になった。この2023年の参加者93名のうち40.9%が昨年も参加しており、59.1%が新規の参加者であった。参加者年代は、2022年に比べて、2023年は30代と20代が大きく減り、40代が49.5%と約半数を占めた。このような結果になった理由は、受講のきっかけが多かった「子供がラグビーをしているから」「友人に紹介されたから」ということに起因していると考

えられる。アンケートの感想にも、「ラグビーママ友が去年から通っていて誘われた」、「息子が普段やっているラグビーの世界の雰囲気を知れた」などの感想が見られた。子どものスポーツ活動に対して、「やりがい」と「負担感」を母親に尋ねた研究では、ほとんどの項目で「やりがい」の項目が上回ったと報告されている（笹川スポーツ財団 2007）。本研究ではコメントにあったような“ママ友”の交流が多くみられていた。子どものラグビーに関わる中で、保護者がラグビーに興味を持ち、実際にラグビー教室に参加して、さらに他の保護者を誘うという流れができていたことが推測される（図1）。また、同会場で小中学生に向けたラグビー教室が実施されていることもこの結果の一因になっていると考えられる。

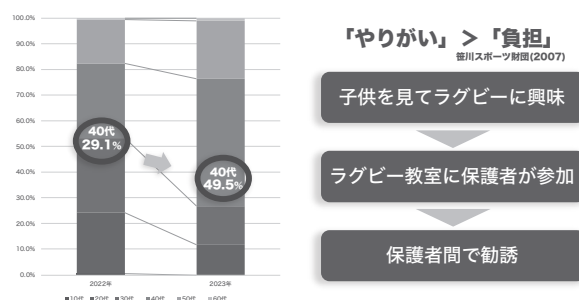


図1. 参加者年代の推移と考察

結論

大学のスポーツ資源を活用することで、「もの与人」が充実し、参加者に大学ならではの価値や経験を提供することができた。積極的な運動への参加や、保護者間の交流の推測など、本件のような取り組みは、地域社会に対して多面的な利益をもたらしている可能性が示唆された。